

『戦後の長野県麻績村における 人口動態の分析的研究』

高 沢 勇

は じ め に

長野県東筑摩郡麻績村は、長野市（北）と松本市（南）のほぼ中央に位置する。それは、上田市（東）と大町市（西）のほぼ中央でもある。本村の背後（西方）には聖山を中心とする山波が打ち続き、正面（東方）には四阿屋山が広がる。総面積は33.83平方キロメートルであるが、上述の地勢から、その8割が山林原野で、宅地および農耕地の合計は2割に過ぎない。総人口は1990年（平成2）の国勢調査時点では3,622人である。

この麻績村は、戦後における青・壮年層を中心とした人口流出によって過疎化を呈しており、また、それに基づく住民の高齢化に伴い、地域の活力が減少しつつある。その原因の一つとして、南の松本市と北の長野市および東の上田市などの主要都市に通ずる主幹道路の未整備があげられる。このために、麻績村から松本市・長野市の各中心部まで到達するのに、自動車では最低60分はかかる。JR篠ノ井線を利用すると、普通列車で松本駅まで34分、長野駅まで40分で行けるが、列車の本数は少ない。1992年（平成4）3月14日改正の時刻表によれば、麻績村の聖高原駅から松本駅へ向う列車の本数は、普通17本、快速6本、急行4本、特急3本である。松本駅から聖高原駅へは、普通15本、快速5本、急行2本、特急3本である。また聖高原駅から長野駅へは、普通14本、快速5本、急行2本、特急3本である。長野駅から聖高原駅へは、普通14本、快速6本、急行4本、特急3本である。朝、夕の通勤・通学時間帯を除くと、その本数は両者の往復とも1時間に1本程度である。

こうした交通網等の立ち遅れを改善することを目的として、1972年（昭和47）6月に中央自動車道長野線（通称:長野自動車道）のインター・チェンジが麻績村に設置されることが決定した。それから15年を経て、1987年（昭和62）5月に長野自動車道の建設工事が開始された。その長野自動車道が、長野県土木部高速道局の情報（1992年3月現在）によれば、1993年（平成5）3月までには、既成の豊科インター・チェンジから麻績インター・チェンジ（仮称）を経て、更埴インター・チェンジ（仮称）まで延長され完成する予定である。更埴インター・チェンジからは関越自動車道上越線（通称:上信越自動車道）に接続し、長野インター・チェンジ（仮称）を経て、須坂インター・チェンジ（仮称）（長野市と須坂市との境界付近に設置予定）に到達する。この区間の建設工事も、ほぼ同時期に完成する予定である。これによって麻績村の住民は、松本市と長野市の各中心部まで自動車30分程度で行くことができるようになる。したがって、県庁所在地の長野市も、中信地区の主要都市である松本市も、完全に自動車通勤可能圏および生活圏に入ることになるのである。

高速・自動車文明の時代において、高速道のインター・チェンジが村内にあるということは大きな価値がある。一本の高速道の開通によって、県内の二大都市（長野市・松本市）の中間に位置する麻績村という農山村地域社会が、どのように変貌してゆくのか。また、地域住民の世論を受けて、村政は積極的にこれを手段としていかなる形で地域の活性化をなしとげてゆくのか。その動向に対しては、本村住民の大きな期待に加えて、県内の他の過疎地域住民からも、また農山村の過疎化に悩まされている県サイドからも、さらには一極集中による大都市の過密状況と山間辺地の過疎状況との是正という緊急課題の対策を迫られている国サイドからも、大きな期待がよせられている。

高速道開通後に予想される麻績村の社会変動を明らかにするためには、それに先立って、少なくとも戦後における麻績村という地域社会の変動の実態を分析しておく必要がある。こうした研究方針に沿って、本稿では、地域社会の変動の基盤となる人口動態とりわけ人口移動の実態を分析し、その特徴を明らかにしたい。

なお、紙幅に制限があるので、本稿の主題「戦後の長野県麻績村における人口動態の分析的研究」を3つの部分に分割して掲載したい。まず、第1稿にあたる本稿においては、戦後の麻績村における人口動態（自然動態、社会動態など）について、総体的見地からマクロ（巨視的）に分析する。次いで、第2稿の「近年の長野県麻績村における県内地区別・市郡別人口移動の分析的研究」においては、最近15年間の麻績村における県内転出入人口の動向について、できるだけミクロ（微視的）に分析する。そして、第3稿の「戦後の長野県麻績村における県外地域別人口移動の分析的研究」においては、戦後の麻績村における県外転出入人口の動向について、できるだけミクロ（微視的）に分析する。第1稿から第3稿にわたる全体的総括は、第3稿の最後におこなうことにしたい。

1. 人口・世帯数の実態

(1) 人口の推移

麻績村の人口は、第1表に示したように、戦前の1920年（大9）から1940年（昭15）までは、わずかながら増加していた。1940年（昭15）から1950年（昭25）までの10年間に1,036人も増加したのは、戦災疎開引揚などの人口が本村に流入した結果であろう。これによって、本村の人口は5,855人にまで増加したが、5年間隔の数字でみると、この年以降は減少傾向を示している。それでも1970年（昭45）までは戦前の水準を維持していたが、その年以降はその水準を下回り、1990年（平2）には3,600人台に落ちこんでいる。

麻績村の人口減少傾向は、わが国の経済が敗戦直後の復興期から成長期に入る1950年（昭25）頃から始まる。その推移を5年間隔の数字でみると、減少人口が最も多いのは、1950年代後半の531人である。これは年平均106人ももの減少になる。これについて1960年代前半の377人（年平均75人）、1970年代前半の353人（年平均71人）の順である。1960年代後半の191人を除けば、1955年から1975年までの20年間は、いずれも5年間に350人を超える人口が減少していることになる。

1970年代後半以降は減少人口も比較的少なくなっている。これは、国の工業の地方分散政策

および本県の主要都市集中型工業発展などによって、麻績村から通勤可能な松本市、長野市等の都市において労働の場が拡大したことによるものであろう。しかしながら、1970年代後半から1980年代後半までの15年間における減少人口は537人であるから、この期間においてもなお年平均36人は減少していることになる。

1950年（昭25）から1990年（平2）までの戦後40年間における麻績村の減少人口は2,233人に達する。（ただし、この中には戦災疎開人口の戦後の帰郷による減少も含まれていることを付記しておく。）これは1990年（平2）の総人口の61.7%に相当するものである。また、それは年平均56人の減少を示している。

(2) 世帯数の推移

麻績村の世帯数は、前掲第1表に示したように、戦前の1930年代においては18世帯が減少している。しかし、1940年代には163世帯もの増加を示している。これは、前述のごとく、戦災疎開引揚などの人口流入によるものであろう。ところで、人口数は1950年代前半以降、一貫して減少傾向を示しているのに対して、世帯数は1950年代前半には17世帯が増加している。その後半には1世帯の減少を示したが、1960年代前半には再び4世帯が増加し、その後半においても5世帯の増加を示している。これは、戦災疎開引揚者がそのまま本村に定住したものと推測される。

しかしながら、1970年代前半から1980年代前半までの15年間は減少傾向を示している。1970年代前半には11世帯が減少し、その後半も3世帯の減少を示した。ことに1980年代前半には35世帯も減少している。これは年平均7世帯の減少にあたる。ところが、1980年代後半においては、人口数の減少にもかかわらず、81世帯の増加を示している。これは年平均16世帯という著しい増加である。

このように、前述の一貫した人口減少と比較してみると、世帯数は、総体的には、むしろ増加する傾向を示している。これは、戦後の麻績村において、家族構成が変化し、核家族的世帯や単身世帯が増加していることを意味している。なお、戦後の麻績村における、人口の自然的増減および社会的増減にもとづく家族構成の変貌について、詳しくは別稿で扱う予定である。

(3) 世帯構成員の推移

戦後の麻績村における人口の総体的減少に対する世帯数の総体的増加は、当然のことながら世帯構成員の減少をもたらすことになる。麻績村の1世帯当り人口は、前掲第1表に示したように、戦前の1920年（大9）には4.92人であったが、1925年（大14）には5.02人に増加した。さらに1940年（昭15）には5.28人に増加し、1950年（昭25）には5.45人に達している。しかし、これをピークとして、この年以降は一貫して減少傾向を示した。

1955年（昭30）には5.14人へと5年間に0.31人が減少している。1960年（昭35）には、1950年代後半における531人という著しい人口減少と世帯数の停滞とによって、4.66人へと0.48人が減少した。この都市以降、5人未満を記録しているが、1965年（昭40）にはさらに0.37人の減少を示し4.29人となり、1970年（昭45）には4.10人に減少した。

1970年代前半から1980年代前半までの15年間における世帯数の減少にもかかわらず、1世帯当り

第 1 表 人口・世帯数

年 次	西 曆	世 帯 数	人 口			指 数	人口密度 人 / km ²	女 100 人 につき男	1 世 帯 当り人口	対前回比増△減	
			総 数	男	女					世 帯 数	人 口
大正9年	1920	927 ^(世帯)	4,561 ^(人)	2,377 ^(人)	2,184 ^(人)	100.0	134 ^(人)	108.8 ^(人)	4.92 ^(人)	— ^(世帯)	— ^(人)
14	1925	927	4,658	2,331	2,327	102.1	138	100.2	5.02	0	97
昭和5年	1930	930	4,673	2,389	2,284	102.5	138	104.6	5.02	3	15
15	1940	912	4,819	2,424	2,395	105.7	142	101.2	5.28	△ 18	146
25	1950	1,075	5,855	2,884	2,971	128.4	173	97.1	5.45	163	1,036
30	1955	1,092	5,611	2,731	2,880	123.0	166	94.8	5.14	17	△ 244
35	1960	1,091	5,080	2,470	2,610	111.4	150	94.6	4.66	△ 1	△ 531
40	1965	1,095	4,703	2,239	2,464	103.1	139	90.9	4.29	4	△ 377
45	1970	1,100	4,512	2,143	2,369	98.9	133	90.5	4.10	5	△ 191
50	1975	1,089	4,159	1,990	2,169	91.2	123	91.7	3.82	△ 11	△ 353
55	1980	1,086	4,016	1,927	2,089	88.1	119	92.2	3.70	△ 3	△ 143
60	1985	1,051	3,805	1,818	1,987	83.4	112	91.5	3.62	△ 35	△ 211
平成2年	1990	1,132	3,622	1,774	1,848	79.4	105	96.0	3.20	81	△ 183

資料出所：国勢調査

人口は、1975年（昭50）には3.82人へと0.28人の減少を示した。この年以降、4人未満を記録しているが、1980年（昭55）には3.70人に減少し、さらに1985年（昭60）には3.62人へとわずかながら減少している。1990年（平2）には、1980年代後半における81世帯の増加によって、0.42人が減少し、3.20人にまで減少している。1985年（昭60）におけるわが国の世帯平均員数は3.32人であるから、1985年（昭60）の麻績村の世帯平均員数は国のそれを0.30人上回っていた。しかし、1990年（平2）には国の1985年（昭60）の世帯平均員数を0.12人下回っている。（1990年の国の世帯平均員数は、まだ公表されていないので、それと比較できないということを付記しておく。）なお、戦後の麻績村における家族構成員の減少の実態について、詳しくは別稿で扱う予定である。

この第1章で概観した、戦後の麻績村における人口の総体的急減と世帯数の総体的微増およびその結果として生じた世帯員数の激減は、いかなる要因によって生みだされたのか。人口の自然的減少によるものであるのか、あるいは社会的減少によるものであるのか、それとも両者の混合的減少によるものであるのか。自然的減少によるものであるとするならば、出生率の低下による減少であるのか、あるいは死亡率の増加による減少であるのか、それとも両者の混合的減少によるものであるのか。また、社会的減少によるものであるものとするならば、県内転出によるものであるのか、あるいは県外転出によるものであるのか、それとも両者の混合によるものであるのか。さらに、県内転出によるものであるとするならば、どの地区への転出によるものであるのか、あるいは市部・郡部のいずれへの転出によるものであるのか。他方、県外転出によるものであるとするならば、どの地域への転出によるものであるのか。

次の第2章および第3章では、これらの点について解明したい。その順序として第2章では自然動態とその特徴について分析し、第3章では社会動態とその特徴について分析する。

2. 自然動態とその特徴

(1) 出生数の推移

麻績村における出生数は、第2表に示したように、1950年代後半には362人を示している。年平均72人である。しかし、1960年代前半には296人へと66人が減少している。その後半には312人へと16人の増加を示したが、1970年代前半から1980年代後半までの20年間においては一貫して大幅な減少傾向を示している。1970年代前半には70人が減少し、その結果242人に激減して、300人台を大きく下回った。その後半にも27人の減少を示し、実数は215人となった。年平均43人である。1980年代前半にはさらに166人へと49人の減少を示し、200人台を著しく下回る実数を記録した。その後半においても51人が減少し、実数は115人にまで減少している。これは年平均23人である。戦後の麻績村における出生数は、1950年代後半から1980年代後半までの30年間に247人という著しい減少を示したことになる。

この推移を、1950年代後半の出生数を基準（100）とした数字でみると、1960年代前半には82に急減する。その後半には86に微増しているが、1970年代前半には再び67に急減し、後半には59へと

漸減する。1980年代前半には46へと減少し、1950年代後半の実数の半数を下回り、さらに後半には32にまで急減し、基準の3分の1を幾分下回る出生数を記録している。

各期間の出生数（5年間の合計数）を、それぞれの初頭年度の総人口に対する比率でみると、1950年代後半は6.5%である。1960年代前半には5.8%へと0.7%低下したが、後半には6.6%へと0.8%上昇している。しかし、1970年代前半には5.4%へと1.2%の急低下を示し、6%を大きく下回り、後半には5.2%に達した。1980年代前半には4.1%へとさらに1.1%の急低下を示し、これに続く後半も同じく1.1%の低下を記録して3%にまで落ちこんでいる。

1950年代後半の実数と1980年代後半のそれとを比較すると、出生数は約3分の1に激減しているのに対して、それぞれの初頭年度総人口に占める出生数（5年間の合計数）の比率は約2分の1に減少しているにすぎない。これは、言うまでもないことであるが、総人口の減少によるものである。いずれにしても、出生数の著しい減少は、麻績村の将来における活性化にとって大きなマイナスの要因になるものと危惧されるのである。

(2) 死亡数の推移

麻績村における死亡数は、前掲第2表に示したように、1950年代後半には248人を示している。年平均50人である。1960年代前半には226人へと22人の減少を示したが、その後半は244人へと18人の増加を記録している。1970年代においても、前半は237人へと7人減少したが、その後半には273人へと36人も増加を示している。1980年代も同様の波がみられるが、その前半においては181人へと92人の著しい減少を記録している。しかし、後半には194人へと13人の微増を示している。戦後の麻績村における死亡数の推移においては、前述のごとく、一貫した増加傾向あるいは減少傾向をみることができない。しかしながら、1970年代後半から1980年代前半にかけての急増・激減を除くならば、総体的には漸減の傾向を示している。

この推移を、1950年代後半の死亡数を基準（100）とした数字でみると、1960年代前半は91に減少するが、その後半には再び98に増加している。1970年代の前半は96に微減しているが、その後半には110に急増している。1980年代の前半には73にまで一時的に激減したが、後半には78へと微増している。

各期間の死亡数（5年間の合計数）を、それぞれの初頭年度の総人口に対する比率でみると、1950年代後半は4.4%である。1960年代前半も4.4%を維持しているが、その後半には5.2%へと0.8%上昇している。1970年代前半には5.3%へと0.1%の微増を示したにすぎなかったが、その後半には6.6%へと1.3%の急増を示した。1980年代の前半には逆に4.5%へと2.1%の急低下を示したが、その後半は5.1%へと0.6%の上昇を記録している。

死亡数の推移とそれぞれの初頭年度総人口に占める死亡数（5年間の合計数）の比率の推移とを比較すると、前者は、前述のごとく、総体的には漸減傾向を示している。これに対して、後者は1970年代後半までは高率化の傾向を示し、1980年代においても前半・後半とも、1950年代後半の4.4%を上回る率を記録している。これも、言うまでもないことであるが、総人口の減少によるものである。

第2表 自然動態・社会動態

年次	西暦	自然動態						社会動態																		年間 増△減				
		出生		死亡		増△減		転入						転出						転出入超過(△転出超過)										
		総数		県内		県外		総数		県内		県外		総数		県内		県外												
		実数	A	実数	A	実数	A	実数	A	B	実数	B	実数	B	実数	A	B	実数	B	実数	B	実数	A	B	実数	B	実数	B		
昭30~35	1955~60	(人) 362	(%) (6.5)	(人) 248	(%) (4.4)	(人) 114	(%) (2.0)	(人) 828	(%) (14.8)	(%) (100.0)	(人) 505	(%) (61.0)	(人) 323	(%) (39.0)	(人) 1,420	(%) (25.3)	(%) (100.0)	(人) 718	(%) (50.6)	(人) 702	(%) (49.4)	(人) △592	(%) (10.6)	(%) (100.0)	(人) △213	(%) (36.0)	(人) △379	(%) (64.0)	(人) △478	(%) (8.5)
35~40	1960~65	296	(5.8)	226	(4.4)	70	(1.4)	719	(14.2)	(100.0)	453	(63.0)	266	(37.0)	1,225	(24.1)	(100.0)	664	(54.2)	561	(45.8)	△506	(10.0)	(100.0)	△211	(41.7)	△295	(58.3)	△436	(8.6)
40~45	1965~70	312	(6.6)	244	(5.2)	68	(1.4)	912	(19.4)	(100.0)	607	(66.6)	305	(33.4)	1,255	(26.7)	(100.0)	807	(64.3)	448	(35.7)	△343	(7.3)	(100.0)	△200	(58.3)	△143	(41.7)	△275	(5.8)
45~50	1970~75	242	(5.4)	237	(5.3)	5	(0.1)	727	(16.1)	(100.0)	478	(65.7)	249	(34.3)	1,178	(26.1)	(100.0)	753	(63.9)	425	(36.1)	△451	(10.0)	(100.0)	△275	(61.0)	△176	(39.0)	△446	(9.9)
50~55	1975~80	215	(5.2)	273	(6.6)	△58	(1.4)	558	(13.4)	(100.0)	383	(68.6)	175	(31.4)	725	(17.4)	(100.0)	467	(64.4)	258	(35.6)	△167	(4.0)	(100.0)	△84	(50.3)	△83	(49.7)	△225	(5.4)
55~60	1980~85	166	(4.1)	181	(4.5)	△15	(0.4)	534	(13.3)	(100.0)	343	(64.2)	191	(35.8)	717	(17.9)	(100.0)	528	(73.6)	189	(26.4)	△183	(4.6)	(100.0)	△185	(101.1)	2	(-1.1)	△198	(4.9)
60~平2	1985~90	115	(3.0)	194	(5.1)	△79	(2.1)	538	(14.1)	(100.0)	372	(69.1)	166	(30.9)	692	(18.2)	(100.0)	465	(67.2)	227	(32.8)	△154	(4.0)	(100.0)	△93	(60.4)	△61	(39.6)	△233	(6.1)

資料出所:長野県総務部情報統計課

注(1):1955年(昭30)、1956年(昭31)は旧麻績村と日向村との合計数である。

注(2):構成比(A)は各5年間の初頭年度における総人口に占めるそれぞれの比率。構成比(B)は転入・転出総数等に占める県内・県外転出入実数等の比率。

(3) 自然増減数の推移

麻績村における人口の自然増減数は、前掲第2表に示したように、1950年代後半には114人の増加を示している。しかし、1960年代前半には、死亡数の減少にもかかわらず、出生数の著しい減少によって、70人へと増加実数において44人も減少している。その後半は、死亡数の増加分を出生数の増加分が補足したことによって、68人へと2人の減少にとどまっている。1970年代前半には、死亡数の微減を大幅に上回る出世数の急減によって、5人へと増加実数において63人もの減少を示した。その後半も、死亡数の急増と出生数の減少とによって、同じく63人もの減少を示し、これによって自然増減実数は-58人を記録している。1980年代前半は、出生数の減少分の約2倍に相当する死亡数の激減によって、-15人へと実数において43人の増加を示した。しかし、その後半には、死亡数の微増と出生数の減少とによって、-79人へと実数において64人の大幅な減少を記録している。このように、戦後における麻績村の自然増減数は、1950年代後半には114人（年平均23人）の増加を示していたが、それ以降は総体的に減少傾向を示し、1980年代後半には79人（年平均16人）の減少を記録するに至っている。

各期間の自然増減数（5年間の合計数）を、それぞれの初頭年度の総人口に対する比率でみると、1950年代後半は2.0%である。しかし、1960年代前半には1.4%へと0.6%の低下を示している。その後半は、同じく1.4%を維持している。1970年代に入ると、前半には0.1%へと1.3%の急低下を示し、後半にはさらに1.5%の急低下を記録して-1.4%に下降した。1980年代前半には-0.4%へと1.0%の上昇を示したが、その後半には再び1.7%の急激な低下を記録して-2.1%にまで落ちこんでいる。

この第2章で概観した戦後の麻績村における出生数の総体的急減傾向は、死亡数の総体的漸減傾向を大幅に上回るものであった。したがって、自然増減実数においても、総体的には急減傾向を示している。しかしながら、自然増減実数は、1950年代後半から1970年代前半までの20年間においては、減少しつつも自然増加を記録している。また、これに続く1970年代後半から1980年代後半までの15年間においては、自然減少を記録してはいるが、その実数は、最も多いものでも1980年代後半の79人である。

ところが、第1章で概観した戦後の麻績村における人口減少は、前述の1970年代後半から1980年代後半までの15年間における自然減少数をはるかに上回るものである。その上、1950年代前半から1980年代後半までの40年間において一貫した減少を示しており、その実数は最少でも143人（年平均29人）、最高では531人（年平均106人）に及んでいる。

したがって、戦後の麻績村における人口減少の大きな要因は社会的減少である。これを確認した上で、次の第3章においては社会動態とその特徴について分析することにした。

3. 社会動態とその特徴

(1) 転出人口の実態

① 転出総数の推移

麻績村の転出総数は、前掲第2表に示したように、1950年代後半には1,420人で、これが1950年の総人口に占める割合は25.3%に及んでいる。したがって、年平均約5%の人口が転出していることになる。転出総数は、1950年代後半以降、全体的には減少傾向にある。1960年代後半の増加現象を除けば、一貫して減少しており、ことに1970年代後半以降は1,000人台を大きく下回っている。

この減少過程を、1950年代後半の実数を基準(100)とした数字でみると、1960年代前半から1970年代前半までの15年間は83~88である。これに対して、1970年代後半から1980年代後半までの15年間は49~51に減少している。

しかしながら、それぞれの期間の初頭年度における総人口に占める転出総数の比率で、その推移をみると、1960年代後半とそれに続く1970年代前半とはそれぞれ1950年代後半の25.3%をわずかながら上回っている。1970年代後半から1980年代後半までは低下しているが、それでも17.4%~18.2%であるから、年平均約3.5%の人口が転出していることになる。

② 県内転出人口の推移

麻績村の県内転出人口は、前掲第2表に示したように、1950年代後半には718人であった。まず、実数の推移をみると、1970年代前半までの15年間は総じて増加傾向を示したが、1970年代後半から1980年代後半までの15年間は総じて減少傾向にある。5年間の合計数で県内転出人口が最も多かったのは1960年代後半の807人である。逆に最も少なかったのは1980年代後半の465人である。

この推移を、1950年代後半の実数を基準(100)とした数字でみると、1960年代前半は93に減少したが、その後半には112に増加し、1970年代前半も105を示した。しかし、1970年代後半から1980年代後半までは65~74に低下している。

次に、県内転出人口が転出総数に占める割合の推移をみると、1950年代後半には51%であった。しかし、この時期以降、総体的に増加傾向を示し、1960年代後半には64%に達し、さらに1980年代前半には74%にまで増加し、その後半も67%を示している。

③ 県外転出人口の推移

麻績村の県外転出人口は、前掲第2表に示したように、実数の推移においては、ほぼ一貫して減少傾向を示している。1950年代後半には702人であったが、1960年代前半には561人へと141人減り、その後半には448人へと113人減少するなど大幅な減少を示した。さらに1970年代前半から後半にかけては425人から258人へと167人が減少している。こうした結果、1980年代前半には189人にまで低下したが、その後半は幾分増加している。

この推移を、1950年代後半の実数を基準(100)とした数字で比較してみると、1960年代前半

には80に減少し、その後半には64に減少した。1970年代前半には61であったが、その後半には37に著しく減少している。1980年代前半には27にまで減少したが、その後半には32に幾分増加している。

次に、県外転出人口が転出総数に占める割合の推移をみると、1950年代前半には49%で、県内転出人口とはほぼ同数であった。しかし、この時期以降は、先にみた県内転出人口の推移とは逆に、総体的に減少傾向を示している。それでもなお1960年代前半においては46%を維持しているが、後半には36%に低下し、1970年代後半までの15年間は約36%であった。1980年代前半には26%にまで低下したが、後半には33%へと多少増加している。

以上においては、戦後の麻績村における転出人口の実態について簡単に分析した。ここで、その特徴について総括しておきたい。まず、転出総数の推移にみられる特徴は、総体的に減少傾向を示しているということである。また、それを期間別にみた場合には、1950年代後半における転出人口が最高(1,420人)を記録しており、これに続く1960年代前半から1970年代前半までの15年間ににおいては約1,200人減り、さらに1970年代後半から1980年代後半までの15年間ににおいては約700人に急減しているということである。

次に、県内転出人口の推移にみられる特徴は、総体的には、1950年代後半から1970年代前半までの20年間は約700人～800人という多量の転出を記録しているが、1970年代後半から1980年代後半までの15年間は約500人に減少しているということである。また、それを期間別にみた場合には、1960年代後半における転出人口が最高(807人)を記録しており、これにつぐ転出量(753人)を示したのは1970年代前半であるから、先の転出総数におけるピーク時期と比較すると10年～15年おくらせているということである。

最後に、県外転出人口の推移にみられる特徴は、総体的には著しい減少傾向を示しているということである。また、それを期間別にみた場合には、1950年代後半における転出人口が最高(702人)を記録しており、これに続く1960年代前半から1970年代前半までの15年間ににおいては約400人～550人に減り、さらに1970年代後半から1980年代後半までの15年間ににおいては約200人～250人に急減しているということである。なお、県外転出のピーク時期が1950年代後半であり、これに対して県内転出のそれが10年後の1960年代後半であるということは、戦後日本の経済開発の段階と対応する特徴である。

(2) 転入人口の実態

① 転入総数の推移

麻績村の転入総数は、前掲第2表に示したように、1950年代後半には828人で、これが1950年の総人口に占める割合は14.8%であった。したがって、年平均約3%の人口が転入していることになる。転入総数の推移をみると、1960年代後半における増加現象を除けば、総じて減少傾向にある。1960年代前半には719人へと、その前の5年間に比べて約100人減少したが、その後半には約200人増加して912人に及んだ。しかし、1970年代前半には逆に約200人減少し、さらにその後半

には約170人減少して558人になったが、1980年代は前半・後半とも530人台を維持している。

この推移を、1950年代後半の実数を基準（100）とした数字でみると、1960年代後半は110を示したが、その前後の5年間は87～88に低下している。さらに1970年代後半から1980年代後半までの15年間は65～67に低下している。

しかしながら、それぞれの期間の初頭年度における総人口に占める転入総数の比率で、その推移をみると、実数の減少ほどには低下していない。1950年代後半の14.8%に比べて、1960年代後半が19.4%と高率であるのは実数が多いことから別としても、1970年代前半は実数が減少しているにもかかわらず16.1%と高比率である。1970年代後半以降においても13.3%～14.1%にとどまっている。いうまでもなく、このことは総人口の減少に起因するものである。

② 県内転入人口の推移

麻績村の県内転入人口は、前掲第2表に示したように、1950年代後半には505人であった。まず、実数の推移をみると、1960年代後半における607人という増加現象を除外すると、総体的には減少傾向にあるといえる。しかしながら、顕著な減少傾向を示すのは1970年代後半以降である。1960年代前半と1970年代前半においては約450人～約480人であるから20人～50人程度の減少にすぎない。これに対して、1970年代後半以降の15年間は約340人～約380人であるから、約120人～160人の大幅な減少を示している。

この推移を、1950年代後半の実数を基準（100）とした数字でみると、1960年代の前半は90であるが、後半は120を示している。1970年代に入ると、前半は95であったが、後半には76に低下した。1980年代に入ってから前半は68に低下しているが、後半には74に幾分増加し停滞している。

次に、県内転入人口が転入総数に占める割合の推移をみると、1950年代後半は61.0%であった。この構成比は、この時期以降1980年代後半まで、総体的には高くなっている。1970年代前半と1980年代前半においては、前5年間の構成比よりも低下しているが、1950年代後半の61.0%に比べれば、約3～5%高い。その他の時期は、いずれも上昇傾向にある。

③ 県外転入人口の推移

麻績村の県外転入人口は、前掲第2表に示したように、1950年代後半には323人であった。まず、実数の推移をみると、全体的には減少傾向にあるといえる。1960年代後半と1980年代前半においては前5年間の実数を上回っているが、1950年代後半の323人に比べれば減少している。全体的に顕著な減少傾向を示すのは、前項の県内転入人口の場合と同様に、1970年代後半以降である。1970年代前半までは、減少しながらもなお5年間に最低約250人が転入しているが、その後半には175人へと急激に減少している。1980年代前半には幾分の増加を示しているが、その後半には166人にまで減少している。

この推移を、1950年代後半の実数を基準（100）とした数字でみると、1960年代前半には82に減少したが、次の5年間には94に増加した。しかし、1970年代前半には再び77に減少し、その後

半には54にまで著しく減少した。1980年代の前半は若干の増加傾向を示したが、その後半には51に減少し、1950年代後半の約半数に落ちこんでいる。

次に、県外転入人口が転入総数に占める割合の推移をみると、1950年代後半は39.0%であった。この構成比は、言うまでもないことであるが、県内転入人口の構成比の高率化とは逆に、総じて低率化傾向を示し、1980年代後半には30.9%にまで低下した。1970年代前半と1980年代前半との両時期においては、その前の時期よりも高率化する傾向を示したが、一時的なものであったといえよう。

以上においては、戦後の麻績村における転入人口の実態について簡単に分析した。ここで、その特徴について総括しておきたい。まず、転入総数の推移にみられる特徴は、総体的には、1950年代後半から1970年代前半までの20年間は約700人～900人という多量の転入を記録しているが、1970年代後半から1980年代後半までの15年間は約550人に減少しているということである。また、それを期間別にみた場合には、1960年代後半における転入人口が最高（912人）を記録しているということである。なお、前節で触れた転出総数のピーク時期が1950年代後半であり、これに対して転入総数のそれが10年後の1960年代後半であるということは、やはり戦後日本の経済開発の段階と対応する特徴である。

次に、県内転入人口の推移にみられる特徴は、総体的には減少傾向を示しており、1950年代後半から1970年代前半までの20年間は約450人～600人という多量の転入を記録しているが、1970年代後半から1980年代後半までの15年間は約350人～400人に減少しているということである。また、それを期間別にみた場合には、1960年代後半における転入人口が最高（607人）を記録しているということである。

最後に、県外転入人口の推移にみられる特徴は、総体的には減少傾向を示しており、1950年代後半から1970年代前半までの20年間は約250人～300人の転入を記録しているが、1970年代後半から1980年代後半までの15年間は約150人～200人に減少しているということである。また、それを期間別にみた場合には、1950年代後半における転入人口が最高（323人）を記録している点では、前節でみた県外転出人口の特徴と同様である。しかし、県外転出人口が1960年代前半以降において著しい減少傾向を示しているのに比べれば、県外転入人口の減少は穏やかである点が特徴的である。

(3) 転出入超過人口の推移

① 転出入超過総数の推移

麻績村の転出入超過総数の推移をみると、前掲第2表に示したように、1950年代後半から1980年代後半にいたるまで一貫して転出超過であった。そこで、転出超過の推移をみると、1950年代後半の転出超過人口は592人で、7期間中最も多い。総体的には、この時期以降、減少傾向を示している。1950年代後半から1960年代前半にかけては86人減少し、その後半にはさらに163人という著しい減少を示した。1970年代前半には一時的に108人増加したが、その後半には284人とい

う大幅な急減を示し、転出超過総数は167人に減少した。1980年代は約150人から約180人程度で停滞している。

この推移を、1950年代後半の実数を基準（100）とした数字でみると、1960年代前半には86に減少し、その後半には58へと約半数に急減した。1970年代前半には76にまで増加したが、その後半には28へと約4分の1に減少している。1980年代においても、前半は31に幾分増加したが、後半には26に減少し停滞している。

次に、この転出超過総数の推移を、それぞれの期間の初頭年度における総人口に占める比率でみると、1950年代後半のそれは10.6%であるから、この5年間に約1割の人口が転出したことになる。年平均では約2%の人口が転出していることになる。この比率は、1970年代前半までは実数の減少にかかわらず大差がない。ただし、1960年代の後半は7.3%であるから多少低下しているが、それでも1970年代後半以降の比率に比べれば、約2倍の高率である。これに対して、1970年代後半には4.0%に低下し、1980年代前半には実数の増加に伴ってわずかながら高くなったが、後半には再び4.0%を維持している。

② 県内転出入超過人口の推移

麻績村の県内転出入超過人口の推移をみると、前掲第2表に示したように、一貫して転出超過である。そこで、転出超過の推移をみると、1950年代後半の実数は213人であった。この時期以降、総体的には減少傾向を示しているが、1950年代後半から1960年代後半までの15年間における減少傾向はきわめて穏やかである。1970年代前半には275人に増加したが、その後半には84人にまで一挙に減少した。1980年代前半には再び185人に増加したが、その後半にはまた93人に減少している。

この推移を、1950年代後半の実数を基準（100）とした数字でみると、1960年代前半は99、後半は94へと漸減している。1970年代の前半は129人に急増したが、その後半には39に激減している。1980年代も70年代と同様に、その前半は84に増加したが、後半には44に減少している。

次に、県内転出超過人口が転出超過総数に占める割合の推移をみると、1950年代後半は36.0%で、県外転出超過人口に比べると、かなり低い。しかし、この時期以降、全体的には高率化傾向を示している。1960年代前半はまだ41.7%で、県外転出超過人口の方が多いが、その後半には58.3%となり、県外のそれを上回った。1970年代前半には、さらに61.0%へと増加したが、後半には50.3%に低下した。1980年代前半には、県内転出者の増加と県外転出者の減少とにより、101.1%に達したが、これはむしろ一時的なもので、後半には60.4%にもどっている。

③ 県外転出入超過人口の推移

麻績村の県外転出入超過人口の推移をみると、前掲第2表に示したように、1980年代前半の転入超過を除けば、その他の時期はすべて転出超過である。そこで、転出超過の推移をみると、1950年代後半には379人を示した。これは年平均76人という大きな転出超過である。しかし、この時期以降、総体的には著しい減少傾向を示している。1960年代前半には84人減少しているし、

その後半には152人も減少して実数は143人となった。1970年代前半には33人増加したが、その後半には93人減少して実数は83人になり、つづく1980年代前半にも85人減少して実数は転入超過2人となった。しかし、その後半は63人増加し、実数は61人となっている。

この推移を、1950年代後半の実数を基準(100)とした数字でみると、1960年代の前半には78に、後半には38に著しく減少している。1970年代の前半には46に多少増加したが、その後半には22に減少した。1980年代前半には若干の転入超過を示したが、後半には16に増加している。

次に、県外転出超過人口が転出超過総数に占める割合の推移をみると、1950年代後半は64.0%で、県内転出超過人口を大きく上回っている。しかし、この時期以降、全体的には低率化傾向を示した。それでも、なお1960年代前半には58.3%を占め、実数において県内のそれを84人上回っていたが、後半には41.7%と低率化している。1970年代の前半には、さらに39.0%に低下したが、後半には49.7%に高まった。1980年代の前半には、前述のごとく、再び一時的に転入超過を示したが、後半には転出超過に戻った。しかし、その実数は少なく、構成比も39.6%で停滞している。

以上においては、戦後の麻績村における転出入超過人口の実態について簡単に分析した。ここで、その特徴を総括しておきたい。まず、転出入超過人口総数の推移にみられる特徴は、全期間を通して転出超過であるということである。その実数の推移は、総体的には減少傾向を示しており、1950年代後半から1970年代前半までの20年間は約350人~600人という多量の転出超過を記録しているが、1970年代後半から1980年代後半までの15年間は約150人~200人に急減しているということである。また、それを期間別にみた場合には、1950年代後半における転出超過人口が最高(592人)を記録しているということである。

次に、県内転出入超過人口の推移にみられる特徴は、全期間を通して転出超過であるということである。その実数の推移は、総体的には減少傾向を示しているが、1970年代前半と1980年代前半において急増しているということである。また、1950年代後半から1970年代前半までの20年間は200人~約300人の転出超過を記録しているが、1970年代後半から1980年代後半までの15年間は約100人~200人未満に減少しているということである。さらに、それを期間別にみた場合には、1970年代前半における転出超過人口が最高(275人)を記録しているということである。

最後に、県外転出入超過人口の推移にみられる特徴は、1980年代前半の転入超過(2人)を除いた全期間において転出超過であるということである。その実数の推移は、総体的には急減傾向を示しており、1950年代後半から1960年代前半までの10年間は約300人~400人という多量の転出超過を記録しているが、これにつづく1960年代後半から1970年代前半までの10年間は約150人~200人に半減し、さらに1970年代後半から1980年代後半までの15年間は100人未満に急減し、ことに1980年代前半においては、前述のごとく、転入超過を記録しているということである。また、それを期間別にみた場合には、1950年代後半における転出超過が最高(379人)を記録しているということである。なお、県外転出超過のピーク時期が1950年代後半であり、これに対して県内転出超過のそれが15年後の1970年代前半であるということは、本章第1節で触れた県内転出のピー

ク時期が1960年代後半であることと比較すれば5年のおくれであるが、大きな流れでみるならば、やはり戦後日本の経済開発の段階と対応する特徴である。

4. 年間増減人口の推移

本章では、麻績村の年間増減人口の推移についてみることにしたい。まず、実数の推移をみると、前掲第2表に示したように、1950年代後半から1980年代後半にいたるまで一貫して減少人口である。そこで、減少人口の推移を分析すると、1950年代後半は478人であったが、この時期以降、総体的には減少傾向を示している。1960年代の前半には42人減少し、後半には161人減少して実数は275人となる。1970年代の前半は171人増加したが、後半には221人の大幅な減少を示した。1980年代は、その前半に27人減少して実数は198人となったのであるが、後半には35人増加して実数は233人に戻っている。

この推移を、1950年代後半の実数を基準（100）とした数字でみると、1960年代前半は91であるが、後半には58にまで減少した。1970年代に入ると前半は93に増加したが、後半は47に再び減少した。1980年代の前半は41に減少しているが、後半には49に戻って停滞傾向を示している。

次に、それぞれの期間の初頭年度における総人口に占める年間減少人口の比率で、その推移をみると、全体的には減少傾向を示しているといえる。1950年代後半は8.5%であるから、年平均では1.7%の減少率である。社会動態における減少人口が多いにもかかわらず低率であるのは、自然動態における増加人口が多かったからである。1960年代前半は実数の減少にもかかわらず8.6%を維持しているが、後半は5.8%に低下した。1970年代の前半は9.9%という高い減少率を示した。これは、社会動態における減少人口の一時的増加に加えて自然動態における増加人口の減少に起因している。1970年代後半には5.4%に低下し、1980年代においても前半は4.9%に低下した。後半は6.1%に上昇しているが、全体的にみれば比較的停滞している。この15年間、自然動態における減少人口の増加にもかかわらず低率状態にあるのは、社会動態における減少人口が少なかったことに起因するといえる。

5. 本稿の総括

本稿においては、戦後の麻績村における人口動態について、総体的見地から分析した。ここで、その特徴について総括しておきたい。

まず、第1章の「人口・世帯数の実態」にみられる特徴について述べる。「人口の推移」をみると、1955年（昭30）には5,611人を示していたが、国勢調査のたびごとに人口が減少して、1990年（平2）には3,622人にまで著しく減少した。これに対して、「世帯数の推移」をみると、1955年（昭30）には1,092世帯で、1970年（昭45）までの15年間は総体的漸増傾向を示し、1970年（昭45）には1,100世帯を記録した。しかし、これにつづく1985年（昭60）までの15年間は漸減あるいは急減の傾向を示し、1985年（昭60）には1,051世帯に減少した。しかしながら、1990年（平2）の国勢調査では1,132世帯という最高の数を記録している。この結果、「世帯構成員の推移」をみると、1955年（昭30）には5.14人であったが、国勢調査のたびごとに減少して、1990年（平2）には3.20人にまで著しく減少した

のである。

次に、第2章の「自然動態とその特徴」について要約する。「出生数の推移」をみると、1950年代後半には362人（年平均72人）を示していたが、総体的には年々減少傾向を示し、1980年代後半には115人（年平均23人）へと、約3分の1を下回る数にまで著しく減少した。これに対して、「死亡数の推移」をみると、1950年代後半は248人（年平均50人）で、多少の波はあるにしても、総体的には漸減傾向を示し、1980年代後半には194人（年平均39人）に減少している。しかしながら、死亡数の減少を大幅に上回る出生数の減少によって、「自然増減数の推移」においては、1950年代後半は114人（年平均23人）の自然増加を示していたが、総体的減少傾向を示し、1970年代後半には-58人（年平均-12人）と自然減少を記録するに至り、1980年代後半には-79人（年平均-16人）を示しているのである。

しかしながら、戦後の麻績村における著しい人口減少は、自然動態における減少数を大幅に上回るものである。したがって、人口減少の、より大きな要因を社会的減少に求めなければならない。そこで次に、第3章の「社会動態とその特徴」について要約する。

まず、「転入人口の実態」にみられる特徴について述べる。「転出総数の推移」をみると、1950年代後半には1,420人（年平均284人）を示していたが、総体的減少傾向を示し、1980年代後半には692人（年平均138人）へと約2分の1に減少している。これに内包される「県内転入人口の推移」をみると、1950年代後半は718人（年平均144人）を示したが、1960年代後半から1970年代前半までの10年間における一時的急増を除けば、総じて漸減傾向を示し、1980年代後半には465人（年平均93人）に減少している。しかし、転出総数に占める割合でみると、1950年代後半には50.6%であったが、全体的には高率化傾向を示し、1980年代後半には67.2%を示している。これに対して、「県外転入人口の推移」をみると、1950年代後半は702人（年平均140人）を示したが、総体的には減少傾向を示し、1980年代後半には227人（年平均45人）へと約3分の1を下回る数にまで著しく減少した。これを転出総数に占める割合でみると、1950年代後半には49.4%を示したが、全体的には低率化傾向を示し、1980年代後半には32.8%に落ちこんでいる。

次に、「転入人口の実態」にみられる特徴について述べる。「転入総数の推移」をみると、1950年代後半には828人（年平均166人）を示していたが、1960年代後半の一時的急増を除けば、全体的には漸減傾向を示し、1980年代後半には538人（年平均108人）に減少している。これに内包される「県内転入人口の推移」をみると、1950年代後半は505人（年平均101人）であったが、1960年代後半の一時的急増を除くと、総体的漸減傾向を示し、1980年代後半には372人（年平均74人）に減少している。しかし、転入総数に占める割合でみると、1950年代後半には61.0%であったが、全体的には高率化傾向を示し、1980年代後半には69.1%を示している。これに対して、「県外転入人口の推移」をみると、1950年代後半は323人（年平均65人）を示したが、全体的には減少傾向を示し、1980年代後半には166人（年平均33人）へと約2分の1に減少した。これを転入総数に占める割合でみると、1950年代後半には39.0%を示したが、全体的には低率化傾向を示し、1980年代後半には30.9%に落ちこんでいる。

そこで次に、「転出入超過人口の実態」にみられる特徴について述べる。「転出入超過総数の推移」をみると、1950年代後半には592人（年平均118人）の転出超過であったが、その実数は総体的に著しい減少傾向を示し、1980年代後半には154人（年平均31人、転出超過）へと約4分の1に減少している。これに内包される「県内転出入超過人口の推移」をみると、1950年代後半は213人（年平均43人）の転出超過であったが、1970年代前半における転出超過実数の一時的急増を除けば、総体的には減少傾向を示し、1980年代後半には93人（年平均19人）へと半減している。しかし、転出入超過総数に占める割合でみると、1950年代後半には36.0%であったが、全体的には高率化傾向を示し、1980年代後半には60.4%を示している。これに対して、「県外転出入超過人口の推移」をみると、1950年代後半は379人（年平均76人）を示したが、総体的に著しい減少傾向を示し、1980年代後半には61人（年平均12人、転出超過）へと約6分の1にまで減少した。これを転出入超過総数に占める割合でみると、1950年代後半には64.0%を示したが、全体的には低率化傾向を示し、1980年代後半には39.6%に落ちこんでいる。

最後に、「年間増減人口の実態」にみられる特徴について簡単に要約すると、1950年代後半には478人（年平均96人）の減少人口を示したが、その実数は総体的には減少傾向を示し、1980年代後半には233人（年平均47人）の減少人口にとどまっている。しかし、総人口が3,622人（1990年現在）にまで減少した農山村地域社会において、現在もなお年平均約50人の人口が減少しつつある。

お わ り に

冒頭において触れたように、本稿では、戦後の麻績村における人口動態について、総体的見地から分析し、その特徴を解明した。しかし、第3章の「社会動態とその特徴」を、より正確に解明するためには、第1章の最後に触れたように、県内地区別・市郡別転出入人口の実態と県外地域別転出入人口の実態とを分析しなければならない。そこで、前者については第2稿「麻績村における県内地区別・市郡別人口移動の分析的研究」において扱い、後者については第3稿「麻績村における県外地域別人口移動の分析的研究」において扱うことにしたい。

参 考 資 料 ・ 文 献

- 1) 麻績村編集・発行『麻績村勢要覧』昭和37・42・46・53・63年度版
- 2) 麻績村誌編纂会編集・発行『麻績村誌（下巻）』平成元年
- 3) 長野県総務部情報統計課編集『長野県統計書』長野県統計協会、各年度版
- 4) 長野県総務部情報統計課編集・発行『長野県の人口（毎月人口移動調査結果報告）』各年度版
- 5) 総理府統計局編集・発行『国勢調査報告（長野県版）』昭和30・35・40・45・50・55年度版
- 6) 総務庁統計局編集・発行『国勢調査報告（長野県版）』昭和60年度版、平成2年度版
- 7) 岸本實著『人口移動論』二宮書店、1978年
- 8) 南亮三郎・上田正雄編『日本の人口変動と経済発展（人口学研究シリーズI）』千倉書房、1975年

- 9) 山口喜一編『人口分析入門』古今書院、1989年
- 10) 国土庁計画・調整局編『我が国の人口移動の実態（昭和57年12月）－「人口移動要因調査」の解説－』大蔵省印刷局、1982年
- 11) 橋本和幸編著『「定住」の社会学的研究』多賀出版、1988年
- 12) 新保満・松田苑子共著『現代日本農村社会の変動－岩手県志和地区の発展過程－』御茶の水書房、1986年
- 13) 元島邦夫・庄司興吉編『地域開発と社会構造』東京大学出版会、1980年
- 14) 福武直著『現代日本社会論（第2版）』東大出版会、1977年
- 15) 今井幸彦編著『日本の過疎地帯』岩波書店、1968年
- 16) 山本正雄編『日本の工業地帯（第2版）』岩波書店、1965年
- 17) 宮本憲一著『地域開発はこれでよいか』岩波書店、1973年
- 18) 吉田寿三郎著『高齢化社会』講談社、1981年